

# 静岡市井川地域の山村における 戦後の耕作地の変化と作物栽培

川上 香

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

## 要 旨

高度経済成長期以前の日本では、多くの山村で、自給を目的とした作物栽培が行われていた。また、焼畑に付随した茶などの換金作物栽培も行われ、人びとは暮らしを維持していた。昭和30年代に焼畑は衰退するが、現在までの山村の耕作地や作物の変化は、具体的に明らかになっていない。本研究では、静岡市井川地域の山村を対象に、個人の事例を通して耕作地の茶畑への転換と、耕作地の変化に伴う作物への影響について論じた。それらは次のようにまとめられる。

- 1 耕作地は、焼畑や常畑、採草地の複合的利用から、高度経済成長期には、茶畑への転換と拡大がおこった。昭和60年頃からは、高齢化により茶畑は縮小化した。
- 2 耕作地の変化に伴い、ヒエやオオムギなどの穀類の自給や、焼畑休閑後に自生した在来茶の利用は、昭和30年代から40年代にかけて終焉を迎えた。
- 3 自給的作物栽培は、昭和30年代から続く常畑と茶畑の一部で現在も持続している。

キーワード：山村、焼畑、常畑、茶、自給作物、南アルプス

---

# Postwar Changes in Cultivated Land and Crop Cultivation in Mountain Villages in the Ikawa Area of Shizuoka City

KAWAKAMI Kaori

Department of Regional Studies,  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

Before rapid economic growth occurred in Japan, crops were cultivated in many mountain villages for subsistence purposes. Cash crops such as tea were also cultivated in conjunction with slash-and-burn farming to sustain people's livelihoods. Although slash-and-burn farming declined in the 1950s, the specific changes that took place in cultivated land and crops in mountain villages up to the present day have not been clarified. This study discusses the conversion of cultivated land to tea plantations and the impact of changes in cultivated land on crops through an examination of individual cases in mountain villages in the Ikawa area of Shizuoka City. A summary of the study is as follows:

1. Cultivated lands were converted to tea plantations from a combination of burnt fields, common fields, and grassland and expanded during the period of rapid economic growth. Starting at about 1985, tea plantations shrank in size due to the aging of the population.
2. With the change in cultivated land, subsistence cultivation of grains, such as Japanese millet and barley, and the use of native tea that grew naturally after the slash-and-burn fallow period came to an end from the mid-1950s to the mid-1960s.
3. Subsistence crop cultivation continues to this day in some continuous cultivation fields and tea plantations that have been in existence since the mid-1950s.

**Key words:** mountain villages, slash-and-burn fields, continuous cultivation fields, tea, subsistence crops, Southern Alps



- |   |  |
|---|--|
| 1. はじめに<br>1.1 先行研究<br>1.2 研究目的と方法<br>1.3 調査地の概要<br>2. 耕作地の変化と作物栽培<br>2.1 昭和20年代後半から昭和30年頃<br>(1) 集落の概要<br>(2) 耕作地と自給的作物栽培<br>(3) 茶の栽培と茶原<br>(4) 焼畑に付随した採草地 | 2.2 昭和30年代から昭和50年代<br>(1) 耕作地の茶畑化<br>(2) 耕作地の変化と作物栽培<br>2.3 昭和60年代から令和4年現在<br>(1) 茶畑の縮小化<br>(2) 茶畑の維持方法の変化<br>(3) 常畑と茶畑での作物栽培<br>3. まとめと考察 |
|---|--|

## 1. はじめに

### 1.1 先行研究

戦後の高度経済成長期<sup>1)</sup>以前の日本では、多くの山村で、自給的な農耕が営まれていた。焼畑は、西南日本外帯の山地において、中心的な資源利用の形であった。四国や九州の山村では、焼畑や、焼畑を行った後の休閑期の耕作地を利用した、茶やコウゾなどを換金し、暮らしを維持していた(池谷 2019: 132-140頁)。しかし、焼畑は、昭和30年代に衰退していく。

現在、人口減少などから、山村の衰退が進んでいる。このような中、池谷は、狩猟、採集、焼畑が、形を変えて現在も維持されている事例を報告している(同掲書: 159-163頁)。また、山村の自給的作物栽培は、小規模な耕作地で、野菜類を中心とした栽培が、現在も続けられている(川上 2022)。

戦後から現在までの山村の耕作地は、どのように変化したのであろうか。また、耕作地の変化が、作物栽培にどのような影響を与えたのだろうか。

1970(昭和45)年の高知県旧池川町椿山で、調査を行った福井は、自給作物栽培のための共有地の焼畑に、昭和32年から植林が行われ、私有地化したことや、自給作物を栽培していた常畑が、スギやヒノキの苗床になっている状況を

報告している(福井 1974: 63, 164頁)。

九州山地の五木村では、戦後は、焼畑に茶園が増やされた。これは、戦争中に全国的に茶の生産量が激減し、1948(昭和23)年から1949年にかけて、五木村の茶が、全国的市場組織に組み入れられたことが要因だという(山本 1973: 139-144頁)。

各地の山村で、調査を重ねた野本は、焼畑は、大部分がスギ・ヒノキなどの植林となり、定畑や茶畑、みかん山などにも転換され、焼畑終焉間際には、焼畑地に換金にかかわる作物が、多く作られていたと報告している(野本 1984: 615, 628頁)。

このように高度経済成長期は、外部の影響を受け、焼畑が植林地に変わり、また、焼畑で換金作物の増産が行われる時期であった。

しかし、この時期の常畑や自給的作物の変化は、先行研究にはあまり見られない。また、高度経済成長期以降から現在までの山村では、どのような変化が起こっているのだろうか。1980年頃から2009年頃にかけて調査が行われた、南アルプス周辺に位置する3か所の山村の報告を紹介する。その3か所は、①大井川上流域の静岡市井川地域の田代集落、②山梨県早川町茂倉集落と雨畑集落、③長野県飯田市旧上村の下栗集落である。

①田代集落については、集落内と、一部の住民の作り地「菅山（すがやま）」の、暮らしの調査が行われた。田代集落内では、茶畑の間にある常畑（シラハタと表記）に、ヒエ、アワなど雑穀や、トウモロコシ、ソバ、ダイズ、アズキ、サトイモ、ショウガなどが栽培されていた（静岡県教育委員会編 1991: 10頁）。家周囲では、茶が栽培され、自給的な畑もあった（落合ら 1993: 26-27頁）。また2003（平成15）年頃は、菅山の作り小屋周囲にある、畑の約80パーセントが、オオムギや野菜から、茶に転換されていた（松田民俗研究所編 2004: 178頁）。

②早川町茂倉集落では、1995（平成7）年の自給的作物栽培が調査されている。焼畑で栽培されていたアズキは、集落の畑で栽培されており、その他、トウモロコシ、キビ、ダイズ、エゴマ、ダイコン、キュウリ、コンニャクが自給的作物として栽培されていた（及川 2007: 169-173頁）。雨畑集落の硯島地区では、本格的な茶園が増え、1978（昭和53）年には、茶の生葉生産が、15,619キログラムに達したという。また馬場地区では、畑一面に植える慣習の無かった茶が、現在では、茶園として増え始め、その面積は30アールとなっているという（早川町教育委員会編 1980: 910, 916頁）。

③飯田市旧上村の下栗集落では、昭和20年代は、家周囲の急斜面の畑作が中心となっており、オオムギ、雑穀、野菜、果物などの自給食料の他、クワ、コウゾ、茶が畑の周囲などに栽培されていた（野中 1992: 12-13頁）。コウゾは、戦争中に売れなくなり、養蚕に転換されていった。このため常畑化した山の通い畑で、クワが栽培された。さらに昭和40年頃、オオムギの値下がりがあった（上村民俗刊行会編 1995: 135-146頁）。養蚕は、昭和50年代まで行われたが、現在は、換金作物として、ブルーベリーが導入されている（飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究所編 2009: 136, 158-159頁）。また、昭和35年頃まで

は、自給と換金を兼ねたオオムギ栽培が盛んであった。従来、栽培されていたオオムギは、「下栗麦」であったが、昭和25年頃、雪に強く、多収の新品種が導入された（野中 1992: 15-16頁）。現在の下栗集落では、高齢の栽培者が、野菜類を中心に自給的作物栽培を行っている。常畑は、家の周囲にあり、石が多い斜面地にある。一部の家では、ウシやヤギ、ニワトリなどの家畜が飼育されており、厩肥や作物残渣、落葉などの有機物を畑に入れ、土壌流亡を防いでいるという（飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究所編 2009: 114-117頁）。

旧上村の茶は、旧南信濃村の農協によって、昭和30年代に地場産業として推奨され、近隣の町村の茶とともに「赤石銘茶」として特産化されたが（松下 2002: 131頁）、下栗集落の茶は、主に贈答や自家用に栽培されているという（飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究所編 2009: 158頁）。

このように、南アルプス周辺山村では、常畑において自給用作物が栽培され、焼畑に付随して栽培されていた茶や、養蚕と結びついたクワなどの換金作物は、焼畑跡地やオオムギなどの耕作地を転換したり、品種を変更したりして増産されていた。静岡市井川地域、早川町雨畑集落、飯田市旧上村下栗集落では、現在も茶の栽培が行われている。

以上の先行研究では、焼畑が、植林や換金作物の耕作地となる変化や、焼畑衰退後の換金作物の変遷、自給的作物が常畑で行われている現状が捉えられていた。しかし、常畑や焼畑などの耕作地の複合や、栽培環境についての情報はわずかで、耕作地が変化していく過程や、作物栽培の変化については、具体的な報告が少ないという共通点を指摘できる。

## 1.2 研究目的と方法

本稿では、静岡市井川地域の上坂本集落を対象として、先行研究にはあまり見られなかった、

表1 調査対象者

名前	年齢	性別	その他
A	90代前半	女	転出（井川地域内）BとEとは兄弟姉妹
B	80代後半	男	
C	80代後半	男	Dの夫
D	80代前半	女	
E	80代後半	女	
F	60代前半	男	
G	60代前半	男	
H	90代前半	女	
I	90代前半	女	転出（井川地域内）Jと姉妹
J	80代後半	女	転出（井川地域内）
K	80代前半	女	転出（井川地域内）Cと兄弟姉妹
L	80代前半	女	転出（井川地域内）Gと兄弟姉妹

耕作地の複合や栽培環境、耕作地の変化に伴う、作物栽培への影響について、個人の事例をもとに具体的に明らかにすることを目的とする。

このため、高度経済成長期以前である、昭和20年代後半から昭和30年頃の集落の概要と、耕作地の種類や場所、地形などの栽培環境、作物栽培の内容などを、まず把握し、そこから現代までの耕作地と作物栽培の変化を、茶畑を軸に明らかにしたい。

調査方法は、表1に示した上坂本集落の住民7名と、井川地域に在住する上坂本集落出身者5名（12名のうち男性4名、女性8名。年齢は2022年5月時点である）の聞き取り調査、製茶工場関係者の聞き取り調査（1名、表1外）、畑の観察、農耕の参与観察である。また、国土地理院所蔵の1947（昭和22）年、1969（昭和44）年、1976（昭和51）に撮影された空中写真と、静岡地方法務局をはじめとする行政機関に所蔵されていた絵図や刊行物などの閲覧を行った。

現地調査は2019年8月と10月の予備調査、2020年10月、2021年3月から6月、11月、12月2022年5月、7月から8月の計8回、約4か月にわたって断続的に行った。

### 1.3 調査地の概要

調査地は、南アルプス（赤石山脈<sup>2)</sup>）周辺山村である、静岡県静岡市葵区井川地域の上坂本集落である。井川地域の位置や気象、地形などの環境と茶栽培の概要を述べ、上坂本集落の変化の指標として、井川地域のダム建設後の状況と、上坂本の世帯数と人口の推移を述べる。

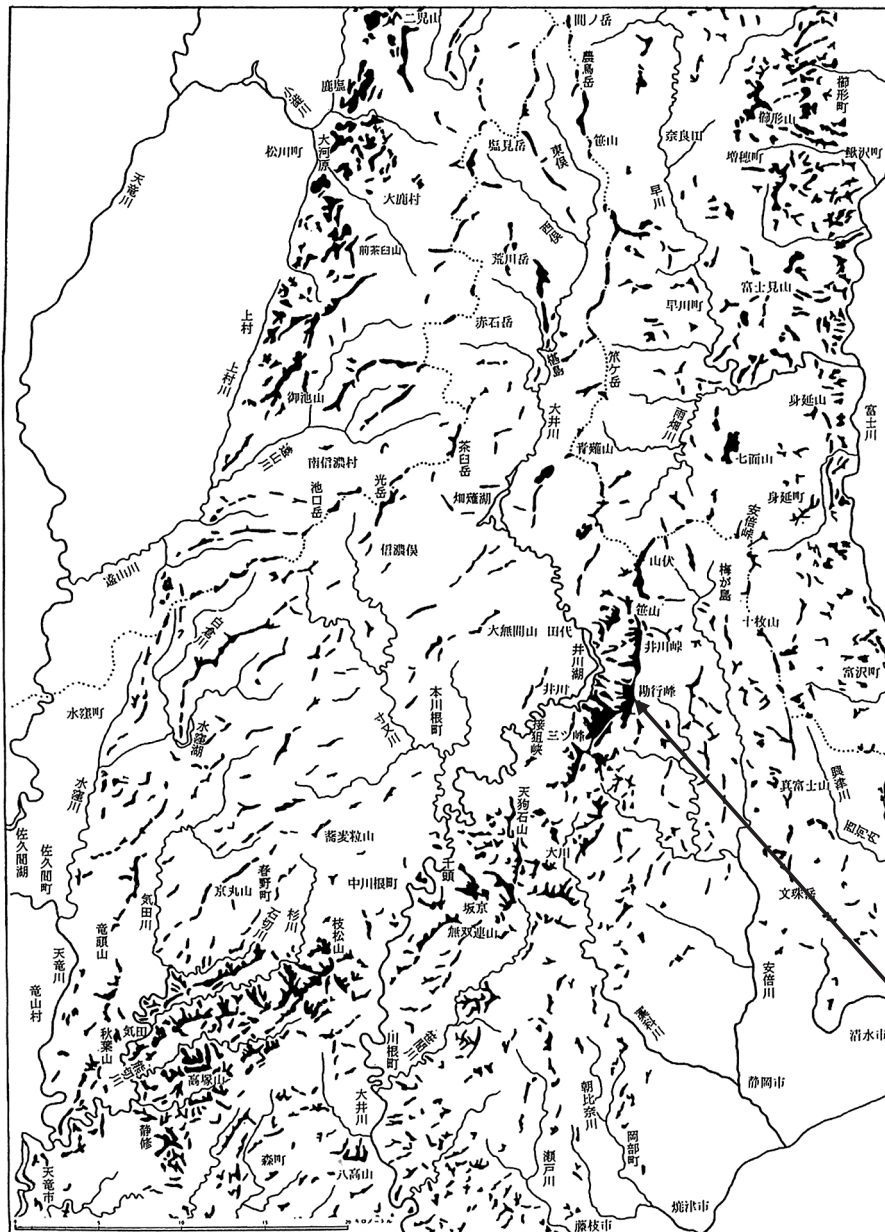
井川地域は、静岡市の中心部から車で約2時間かかる距離にあり（一般道で約60キロメートル）、間ノ岳（3,189メートル）を水源とする大井川の上流部に位置する（図1）。

井川地域の気候は、冬季は冷涼で、積雪が観測され、最低気温がマイナス10度に達することもある。7月から9月は降水量が多く、日本の中でも多雨な地域である。2021年の静岡県井川地点の年間降水量は、3,551.5ミリで、同年の東京都の東京地点の年間降水量2,052.5ミリを大きく上回っている。また、2011年7月19日には、1日の降水量527.5ミリが観測された。これは、国内の1日の降水量の上位から11番目の記録となっている（気象庁ホームページ、「過去の気象データ検索」。2022年9月閲覧）。

また、地形的な環境を見ると、大井川上流部は、急傾斜のV字谷が連なっている。日本最大の浸

食地帯で、多数の崩壊地が見られる（徳嶺・久田 2009: 3頁）。また、松本（1990）によると、赤石山地では、稜線付近や山腹にさまざまな要因による緩斜面が存在することがあり、集落近くにこのような高位緩斜面が存在する場所では、

それらが焼畑の適地となったという（松本 1990: 159-160頁）。松本が作成した図を見ると、大井川左岸の笹山・井川峠・勘行峰付近などに、緩斜面が多い（図2）。左岸に位置する上坂本集落の背後には、緩斜面が多く存在し、焼畑に利用



注：大井川  
左岸から  
笹山、井川  
峠、勘行峰  
付近など  
に緩斜面  
が多い。

図2 大井川左岸の緩斜面（傾斜 20 度以下）の集中  
松本繁樹 1990「赤石山地南部におけるかつての焼畑と高位緩斜面」158 頁の「図1 赤石山地の高位緩斜面」を引用。原図は、1/25,000 の地形図を用いている。コピーをスキャニングし矢印と注を加筆。



されてきたと見られる。大井川右岸にあった島和合集落では、河岸段丘に集落が立地し、背後にあった高位の段丘でムギやヒエを栽培し、常畑の作物の不足を補ってきたという（松田民俗研究所編 2004: 228頁）。筆者の聞き取り調査では、その他にも、大島集落のイモリダン（宇守段とも表記される）、小河内集落のテラシマダンと呼ばれる広大な緩斜面が、耕作地として利用されていた。集落の背後の緩斜面を耕作地に利用してきたことが、井川地域の土地利用の特徴であるといえる。

1947（昭和22）年に撮影された空中写真を見ると、中央付近に大井川が流れ、その両岸には、焼畑と見られる、白色に写った耕作地が、多数点在していた（写真1）。これらの中には、集落の背後の緩斜面が含まれていると見られる。

大井川の中上流部は、傾斜地の水はけの良さなどの栽培条件から、良質な高級茶を生産してき

た地域である（矢島 1934: 128-129頁; 山本 1973: 8頁）。井川地域の旧中野村、旧薬沢村、旧上田村では、1823（文政6）年には、既に、茶が商品化していたと見られる（宮本 1991: 386頁の図）。井川地域で本格的な茶栽培が始まったのは、明治に入ってからと言われている（松田民俗研究所編 2004: 69頁）。上坂本集落では、昭和10年代には、集落近くで焼畑を行った後に、自然に出てきた茶を残し、その場所を常畑化して茶を栽培していた。

次に、井川地域のダム建設後の状況と、上坂本の世帯数、人口の推移を述べる。

井川地域は、1957年に完成した井川ダムと、翌年の静岡市街とを結ぶ井川林道の開通によって暮らしが大きく変化した。雇用先が急増し、コメなどの食料が流入し、食料品の調達が、日常的に行えるようになった（松田民俗研究所編 2004: 223-224頁）。

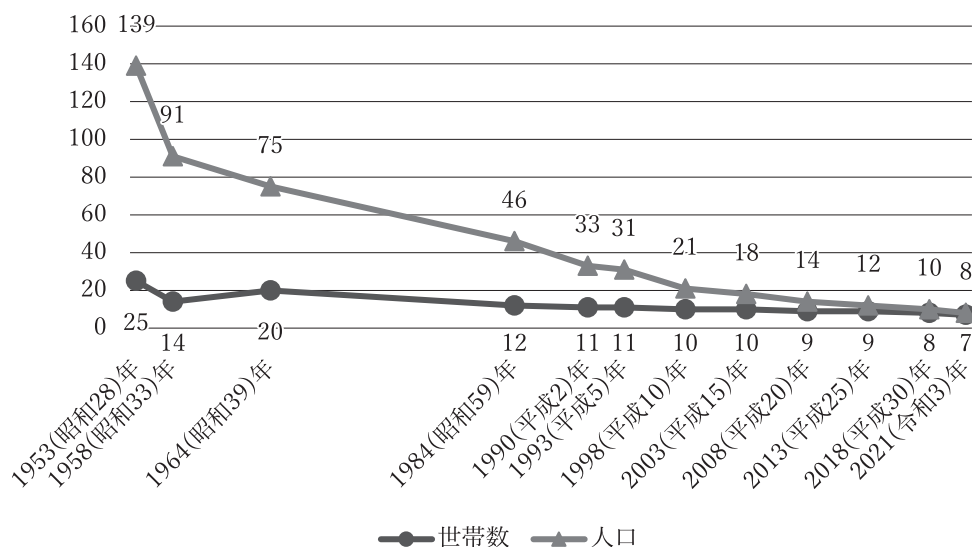


図3 上坂本集落の世帯数と人口の推移（1953年から2021年）（下記資料をもとに作成）

1953年・1958年・1964年については、静岡県安倍郡井川村役場発行の『井川村の概況』（1953年・1958年・1964年）の数値による。1964年については、上坂本集落と近隣の中山集落の数値が逆転し掲載されていると考えられた（中山集落14世帯84人と記載）。しかし、当時は、工事関係者が一時的に居住していたという聞き取り内容もあり、上坂本集落として掲載されている数値（20世帯75人）を用いている。1984年の数値は、静岡市の資料で、同年3月31日現在の、集落ごとの住民登録数、世帯数が集計された紙資料による。1990年から2013年までの数値は、静岡市統計分析係提供の「町名別世帯数の推移」「町名別人口の推移」による。2018年から2021年の数値は、静岡市ホームページの「静岡市の人口・世帯」の「町名別世帯数の推移」「町名別人口の推移」による（2022年9月閲覧）。

1952年から、ダム建設関係者の流入により人口が増加していき、1950年に2,992人であった人口は、井川発電所や上流の畑薙ダムの工事のため、1960年に村の人口はピークの8,236人となった（武貞 2009: 60頁）。ダム完成後は、転出が相次ぎ、1963年には4,157人となる。近年の井川地域の人口は、2000年には874人、2008年には664人、2018年には、481人と減少傾向にある。

これに対して上坂本集落は、1913（大正2）年には戸数が22戸であった。人口は、不明である（静岡県内務部編 1916: 89頁）。旧井川村の村勢の要覧『井川村の概況』によると、1953年には、25世帯139人だった世帯と人口は、ダム完成後の1958年には14世帯91人と減少している。静岡市の資料では、1984年には、12世帯46人となっている。2003年は、10世帯18人となり（静岡市ホームページ「静岡市の人口・世帯」2022年9月閲覧）、人口減少が進行したことがうかがわれる（図3）。

以上のような上坂本集落の人口の推移から、各時代の耕作地の変化を見るため、①焼畑が行われていた昭和20年代後半から昭和30年頃②ダムによる影響と焼畑が中止された昭和30年代から昭和50年代③昭和60年代から令和4年現在、の3つに区別する。

作物の表記については、カタカナを用いているが、読みやすさを考慮し、一部を漢字にしているものもある。茶は、漢字で表記した。また、茶畑での植物の自生については、栽培と表記している。耕作地の中での植物の自生については、半栽培とも捉えることができる。今回は、その検討は行わず、栽培と表記した。

## 2. 耕作地の変化と作物栽培

### 2.1 昭和20年代後半から昭和30年頃

ここでは、昭和20年代後半から昭和30年頃の上坂本集落の概要と、耕作地の種類や場所、作物栽培の内容を把握する。把握のため、1.2で示した国土地理院所蔵の1947（昭和22）年撮影の空中写真と、静岡地方法務局をはじめとする、

その他行政機関所蔵の「駿河国安倍郡上坂本村之絵図」と書かれた絵図2点（正副と思われる）、隣接する小河内集落の地租改正地引絵図を閲覧した。「駿河国安倍郡上坂本村之絵図」は、明治時代に作成されたと推察され、「式厘壺間之縮図」<sup>3)</sup>と墨書きされていた。凡例には、宅地・畑・山林原野・土手敷（沢沿いの土手）・損地（山崩れなどの跡地と思われる）・墓地並びに崩法敷（くずれのりじき、道沿いの崩れた斜面と思われる）・掲示板（集落内の情報共有に利用されたものと思われる）・道・川・河原・字境・村境が色分けされ、示されていた。これを参考に上坂本集落の概念図を作成した（図4）。

図4には、字境と、アカミチと呼ばれる道路、川・沢と、河原を示し、土手敷・損地・崩法敷は、「崩れ」として示した。また、地形を把握するため、「旧井川村森林基本図」（1969年から1978年作成）に、1951年以降の字名が振られたデータの閲覧を行い、調査対象者からの聞き取りも参考にして、1947年の空中写真と、現在の地理院地図に、おおよその字の位置を入れた（図5）。聞き取り調査によると、昭和20年代後半の上坂本集落では、図4で示した字名が使われており、畑の利用なども類似していたことがわかった。

### （1）集落の概要

井川ダム建設前の写真を見ると、写真の下に写る大井川の奥に広大な河原があり、集落と河原の境は、木々が伸びている（写真2）。その上の緩斜面に集落が見え、後方に行くに従って山になっている。集落は、大井川沿いの、ウエムラ・ナカムラ・ハゲタ・クルミドウ・ヨコミチと、ションザワにあった。ションザワは、集落の横を流れる沢の名称でもある。ハゲタにはイドザワという沢があり、昼一昼ほどの共同の水汲み場、洗い場があった。また、ナカムラの上方の斜面には共同墓地があった。

大井川沿いの河原は広く、ションザワ近く of 河原には、小学校の分校や、神社があった。大

井川上流部には、いくつかの金山があり、ションザワの沢では、昭和初期まで砂金が採取されていた。集落は、全体的に南西向きで、日の入りが遅く、井川地域の中では、比較的暖かい集落であると認識されていた。中でもションザワは、日当たりがよく、暖かい場所であった。

集落内から背後の山には、アカミチと呼ばれる道が通っていた。焼畑などがあったサンドウやヤイガレは、ションザワから徒歩約30分であった。同じく焼畑などがあったダシヤマまでは、徒歩約1時間かかった。サンドウやヤイガレは、ションザワ沿いのなだらかなアカミチで行き来ができた。朝夕と集落の人びとが連れ立って歩く姿が見られたという。一方ダシヤマは、距離としては近いものの、集落からは斜面を登る必要があったため、往復に時間を要した。ションザワの急斜面を登ると、ダシヤマの標高の高い所に出た。ションザワやナカムラなどの集落からダシヤマまでは、ヨコミチからマツノモトを通るアカミチと、ナカムラからムラウエを登るアカミチがあった(図4)。

ダシヤマは、隣接する小河内集落と集落の境を接し、小河内集落内にもあった「ダシヤマ」という場所と、集落の境を挟んで、双方は地続きになっていた。双方のダシヤマは、標高700メートルから900メートルに緩斜面が広がり(図5)、日当たりが良かったため、作物が良くできた。対岸の集落からは、上坂本と小河内の双方のダシヤマで行われている焼畑や、焼畑休閑中に草が生えている様子などが良く見えたという。1935(昭和10)年には、上坂本集落のダシヤマの焼畑が撮影<sup>4)</sup>されており、焼畑が大規模に行われていたことがうかがわれる(写真4)。また山田によると、上坂本集落の焼畑は、集落にごく近い場所には点在し、集落中心から約1.5キロメートルから2.0キロメートルのほぼ全域に分布していたという。また、40度の傾斜までは焼畑が可能で、石や礫が多く、土の少ない土地でも、それらを丁寧に取り除いて耕作地を開墾していた(山田

1994: 32-34頁、および図6)。ヤイガレより上方(ササヤマか)は、山林や栗林になっていた。栗林の多くは、個人の所有地であったが、クリの採集は、他者に対しても黙認されていたため、他集落からも拾いに来ていた。

ヤイガレの沢沿いや、ションザワイリは、山崩れや増水などが原因と考えられる「崩れ」が多かった(図4)。Aは、ションザワイリについて、斜面には、岩や石が多く、「上から何が落ちてくるかわからないような場所」であったという。

## (2) 耕作地と自給的作物栽培

集落の耕作地は、5種類あり、それらは①家周囲の常畑、②集落の常畑、③集落の茶原(チャバラ、茶畑の昭和40年頃までの呼び方)、④山の常畑、⑤焼畑であった。調査対象者の耕作地のあった場所を聞き取り調査からまとめた(表2)。①の常畑は、家周囲にあり、②集落の常畑はションザワ沿いやイチノセ、ムラウエにあった。③集落の茶原は、家の周囲や、ションザワ、ムラウエにあった。④山の常畑と⑤焼畑は、サンドウ、ヤイガレ、ダシヤマにあり、小区画の畑が集中していた。

上坂本集落の耕作地は、常畑や焼畑などが複合していた。集落から、山の常畑や焼畑までが近かったため、住民は、本宅に暮らしながら、頻繁に耕作地に行き来し、作物を栽培していた。山の常畑や焼畑には小屋があり、行き来に時間がかかる、子どもが多い家や、高齢者などは、農繁期に小屋に泊まることもあった。

自給的作物は、耕作地によって栽培するものが異なり、①家周囲の常畑では、日常的に使う野菜や、冷涼な山では育ちにくいナスなどの夏野菜、ネギやニンニクなどの薬味、冬野菜の根菜類や葉菜などを栽培した。②集落の常畑では、オオムギとトウモロコシやイモ類、マメ類を二毛作した。オオムギには下肥が必要なため、家から下肥を運べる範囲にあった。④山の常畑では、シコクビエ、キビ、モロコシなどの雑穀や、

表2 上坂本集落の耕作地の種類と場所（昭和20年代後半から昭和30年頃）

聞き取り調査により筆者作成

調査対象者/ 耕作地名	家と周囲の畑	集落の常畑	集落のチャバラ	山の常畑	焼畑
A・B・E (兄弟姉妹)	ナカムラ ションザワ小字カ キン（ションザワ は主に祖母が住む）	ションザワ小字カ キン	ションザワ小字カ キン	ヤイガレ	ヤイガレの上方
J・I (姉妹)	ションザワ小字カ キン	イチノセ	ションザワ小字カ キンおよび家の周 囲に少量	サンドウ	サンドウの上方の カミアゲ ダシヤマ 小字コションザワ
C・K (兄弟姉妹)	ションザワ	ションザワ 小字カワヨケ 岩崎集落のナガシ マダン	ションザワ小字カ キンとカワヨケ 家の背後の斜面	なし	ダシヤマ 小字コションザワ
L	ナカムラ	ムラウエ	ムラウエ ションザワ小字カ キン	ダシヤマ 小字ヒカケンノウ ヤイガレかサンド ウに2か所	不明・多数あり

夏野菜、マメ類やイモ類が栽培された。山の常畑には、気温や地形などの条件によって、茶原も併存していた。⑤焼畑では、ヒエやアワ、マメ類の輪作と、野菜類が栽培された。焼畑の1年目は、木の根が地面に張っており表土が少なかったため、栽培できる作物はヒエ、地カブ（主に青菜を利用するアブラナ科の植物）に限られ、土が溜まりやすい下方で、カボチャを栽培することもあった。2年目以降は、木の根が分解されて、土が出来てくるため、土の深いところで、大長ニンジンやゴボウが栽培できた。サントウハクサイ、ジャガイモやサトイモ、ソバなども作ったという。

個人の事例から、耕作地の具体的な利用方法や自給的作物栽培について、以下のとおりまとめた。

A・B・E（3者は兄弟姉妹）の家は、ナカムラと、ションザワ（主に祖母が暮らす）にあり、家周囲では、ナス、キュウリ、葉菜などを栽培した。ションザワ沿いに集落の常畑があった。

そこでは、オオムギとトウモロコシ、サツマイモなどを作った。山の常畑は、ヤイガレにあり、そこには、金山の作業員の小屋があった。その作業小屋付近に3段の畑があり、夏野菜、シコクビエやサトイモ、サツマイモなどを作っていた。耕作地内には、水が通った跡のような、アラオドと呼ぶ石ばかりの崩れ地もあった。そこから徒歩で1時間ほど上方に登ったところで、幼少期に焼畑を行った。そこでの焼畑は、急斜面が多かったが、7年間、周囲の木を伐って焼畑にし、1回あたり3反から5反程度を焼いて、10年間ほど耕作していたという。焼畑では、雑穀やダイズ、アズキ、ソバ、インゲンマメ、キュウリ、根菜類、イモ類、地カブ、サントウサイなどを栽培した。

CとK（両者は兄妹）の家では、集落の常畑が、ションザワ沿いのカワヨケという場所と、ナガシマダン（隣の岩崎集落内）にあった。カワヨケは、ションザワの対岸にあり、沢の中の巨石にかかる小さなつり橋を渡って通った。カワヨケの畑では、オオムギを栽培し、斜面には、茶



も作っていた。ナガシマダン、岩崎集落の人びとが大勢耕作していた場所で、家からは、河原などを歩いて、片道1時間ほどかかった。対岸には、井川本村集落が見えていた。家から遠かったため、下肥の施肥が必要なオオムギは作れず、肥料が少なくても育つ、ダイズやサツマイモなどを作った。焼畑は、ダシヤマのコションザワという場所にあった。

IとJ（両者は姉妹）の家は、ションザワにあり、ションザワに水車を所有していた。集落の常畑は、ションザワの対岸のイチノセにあった。2枚の広い平らな畑で、オオムギやイモ類を作った。また、サンドウに、沢から続く、急斜面の山を所有していた。沢沿いに小屋があり、横にハウノキが植えられていた。小屋の後ろにはウルシがあり、ウルシを掻いた跡があった。背後の急斜面で焼畑を行い、雑穀や野菜類を作った。祖父は、サンドウに炭窯も持っていた。タルノハ（字名不明）という場所で行った焼畑で、ニンジンとゴボウを作ったところ、大豊作となった。子ども心に、「このニンジンとゴボウをどうするのだろう。」と思ったという。全て本宅まで運び、その冬は、ニンジンとゴボウを使ったキンピラなどが、何度も食卓に上った。また、サンドウの上方にあったクリ林から、さらに1時間ほど登ったところのカミアゲという場所で、両親が小屋に泊まって炭焼きをしていた。そこは、広い緩斜面であったが、標高が高く、所有地の中でも標高の低い所で焼畑を行った。しかし、寒さのため雑穀しか栽培できなかった。

Lの家は、ナカムラにあった。家周囲では野菜類とトウモロコシなどを作った。ムラウエに集落の常畑があり、オオムギ・シコクビエ・サトイモ・ヤツガシラなどを栽培した。ムラウエの畑から、急斜面を20分程登った、ヒカケンノウという場所（写真3）に、山の常畑があった。シコクビエやキビ、サトイモ、ジャガイモを作った。広い緩斜面で、茶も栽培しており小屋もあった。土地を多く所有していたため、焼畑は、さまざま

な場所で行ったという。

### （3）茶の栽培と茶原

次に換金作物であった茶の栽培方法と耕作地、茶原の利用を見る。聞き取り調査によると、集落の背後の急斜面にあった茶原の多くは、住民の幼少期には既にあった。Aらの家やCらの家の茶原は、焼畑を行って自然と生えてきた茶を残して栽培したものだという。Aは、幼い頃（昭和10年代）、ションザワの急斜面の上方で、焼畑が行われているのを見た。自然に出てきた茶を残し、また、出ていない所へは実を採って播いていた。Cの家裏にある斜面地の茶畑は、祖母の代に焼畑を行って、出てきた茶を残したものだという。このため、茶は斜面に点在していた。このように自然と生えてきた茶は、「茶カブ」と呼ばれていた。そして、茶カブの点在した茶畑を「茶原」と呼んでいた。茶カブは、数種類あったため、茶の新芽の出てくる時期がそろわなかった。このため、収穫期が2週間ほど続き、手摘みをしていた。茶と茶の株間が広がったため、コウゾやコンニャクなども栽培し、それらは換金していた。

茶の樹勢が衰えてくると、樹勢更新のため、根元から伐採を行った。「ダイギリ」と呼んでいた。その場で「ダイギリ」した茶の木を焼き、茶が生長するまでの3年くらいの間、野菜類やマメ類、雑穀などを栽培した。また、ミョウガ、赤ジソ、フキ、地カブなどが栽培されていた。茶カブの周囲にはツル性のインゲンマメを植え、茶カブが支柱がわりになるように栽培した。また、ダイコンなどの野菜の種子が採れると、播種期であるなしにかかわらず、種子をばらまいておき、生長したものがあれば利用した。春先には地カブの葉の花が茶原の至る所で見られ、集落の養蜂家にとって、ニホンミツバチの蜜源となっていた（川上 2022）。

#### (4) 焼畑に付随した採草地

主な採草地は、焼畑跡地、焼畑周囲の防火帯であった。集落に近い焼畑跡地では、放棄した後の4、5年間に生えてきたものを利用した。植林した焼畑跡地では、スギやヒノキの苗木が大きくなるまでに行う、下草刈りの草を利用した。

焼畑周囲の防火帯とは、延焼を防ぐ目的で作る、焼畑周囲の幅4メートルほどの空き地である。前年の焼畑に隣接して、次の年に焼畑を拡大する場合は、図7のように防火帯を作り、焼畑を拡大した。周囲に生えてきたススキを約5メートル間隔に残し、穂を残せば、翌々年には採草地となったという。集落から近く、作物の出来が良い焼畑は、防火帯の草を利用して、焼畑に入れ続けることで常畑化した。

住民は、種子が付く前のススキや、ヨモギなどを刈って干した、「カッポシ」と呼ぶ干し草を、茶の株間に敷いたり、耕作地に鋤き込んだりしていた。聞き取りによると、住民は、カッポシを入れると土が増え、また、土がやわらかくなると考えていた。刈った草を円錐状にまとめたイナブラを、採草地の中で冬まで干し、冬期に耕作地に運搬した（写真5）。「ひと冬でカッポシを100束くらいは担いで運んだ。」という。集落の畑などに、1日2回以上運び入れられる距離にある採草地が、「良い場所」と言われていた。

ただしオオムギは、カッポシだけでは育ちにくいため、集落の常畑のオオムギ栽培には堆肥も使った。堆肥は、春から秋にかけて生える生の雑草を、沢沿いなどから刈り取って、作業帰りなどに堆肥小屋に運び、積み重ね、分解させて作った。11月初旬のオオムギの播種時に、下肥とともに使った。

このように、昭和20年代後半から昭和30年頃の上坂本集落では、焼畑跡地や防火帯を主な採草地として利用していた。

## 2.2 昭和30年代から昭和50年代

複合していた耕作地は、昭和30年代に入ると

拡大され、茶畑へと転換されていく。空中写真などを参照しながら、個人の事例を通して耕作地の変化をまとめる。

#### (1) 耕作地の茶畑化

前述したように、上坂本集落は、ダム建設による水没の影響を大きく受けている。家や畑が水没した住民の中には、井川地域内や、市街地へ転出する者が出た。転出者の耕作地や山林が、売買されたり、託されたりしたため、結果的に、残った住民に土地が集積されることになった。これらの土地は、元からあった耕作地と共に、茶畑化され、栽培の拡大が図られていく。このような背景には、ダム建設後の井川地域の農業に、水稻や、蔬菜の改良栽培を導入し、茶など特産物の、生産量の増加を図ることで収入を安定させ、理想的な村造りを目指すという、静岡県の行政としての姿勢があった（静岡県総合開発事務局 1955: 序）。また、住民も、子弟の教育費の増大などで、金銭が必要となっていた。

複合していた耕作地が、どのように茶畑に転換されていたのかを、AとBの事例をもとに具体的に明らかにする。

Aは、昭和20年代後半に、集落内の人と結婚した。以下は、嫁ぎ先の耕作地の変化についてである。結婚後に、家と家周囲の常畑、集落の常畑の水没を経験した。

嫁いだ当時、夫と義父は、ムラウエの焼畑跡地と、ヤエガレの山の常畑に茶を増やしつつあった。また、ヤイガレの常畑に隣接した土地で焼畑を行ったところ、茶が出てきたため、それを栽培した。

Aの家では、これに加え、転出者から、カタクラにあった9反の焼畑を譲り受けた。そこは、集落から近く、既に茶畑化が進み、茶が列状に植えられて周囲が採草地になっていた。Aは、焼畑や山の常畑を転換したムラウエとヤイガレ、カタクラの3か所で、広大な茶畑を耕作すること

になった。

Aの聞き取りをもとに、ムラウエの耕作地から茶畑へ転換された耕作地を示した（図8）。

ムラウエの耕作地は、現在も栽培が続いており、集落から近い斜面にある。広さは、全部で7反ほどであると思われた。

図8に示したとおり、茶畑になる前の耕作地は、以下の7つに分類できる。

①は、元からあった茶原で、茶カブが点在していた。地形がすり鉢状になっており、下の方は窪地であったので、大井川から吹き上げる強風が避けられ、作物の生長が良かった。このような耕作地の地形は、「オバアノフトコロ」と呼ばれた。

②の5段畑は常畑で、義父が石積みを行ったもので、野菜類やマメ類を栽培していた。

③の焼畑跡採草地は、焼畑を行ったところ、急斜面で耕作しにくく、主に、採草地にしていた（一部は茶畑化した）。④焼畑跡地は、急斜面で、所どころ大きな切り株があり、自然に生えた茶があった。⑤は古くからある石積みされた3段の常畑で、ムギとイモ類を二毛作していた。⑥は雑穀を栽培していた常畑で、緩斜面であった。⑦は、木の杭が打たれた2段の畑で、オオムギを栽培していた。2段畑は、⑥から20メートルほど下方の緩斜面であった。

③と⑤の間は、焼畑跡と思われる切り株があった。他家が所有しており、Aは、植林され日当たりが悪くなることを恐れ、後に購入した。

以上の耕作地を、Aは、義父と夫とともに、昭和40年頃にかけて、茶畑に変えていった。④の焼畑跡地を中心に、農協からヤブキタ（茶の品種）の実や苗を購入して列状に植えた。④は、中央部分が緩斜面で、周囲の⑥の下部や②に向かって行くほど斜度が急になっていた。このため、義父が作業の負担を心配し、「茶の栽培が、嫌になったらやめればいい。」と言って、周囲には焼畑などに出た茶カブの実を播いてくれた。⑤の

上方には、当時、新幹線工事のため抜根されたという、牧之原台地の茶が100株植えられている。

このような過程を経て、茶畑化を行ったが（写真6）、昭和40年代には、茶の収穫作業の機械化が進み、改植が行われた。昭和30年代に植えた茶の間隔では、茶刈り機が入らなかったため、30年代に植えたヤブキタ（茶の品種名）は抜き、1.8メートルの間隔をあけて列状に茶を植えなおした。1968（昭和43）年頃から5年程かけて植えた。①は、元から茶原であったため、点在する茶カブを抜く必要があった。長年植えられていた茶カブは、根が張り、なかなか抜けず、人手を頼み機材を使って数年かけ抜根した。抜いた茶の木は、義父が長期間かけて焼いた。

ムラウエでは、②および⑤3段畑の一番下の常畑が残された。常畑は、茶畑に囲まれることになった。

次にBの茶畑化の事例を見る。ションザワの急斜面と、ヤイガレの山の常畑、オオムギ畑が茶畑化された。

ションザワに架かる「所沢橋」（ションザワバシ）の写真（写真7）には、家<sup>5)</sup>の後ろの急斜面に、茶カブが点在しているのが見える。焼畑跡に出てきた茶を栽培し、増やし始めた状態であると思われる。茶原は、4、5名が個人別に所有していた。Bの家の茶原は、父親が主に改植を行った。新幹線工事で抜根された牧之原台地の茶900株を、A家と共に購入し、幅40センチくらいに伐って植え、足りないところは苗を購入して植えた。

ヤイガレにあった山の常畑の茶畑化は、主にBが行った。林道が開通（昭和43年着工）したため、業者に依頼し、ブルドーザーを使って大規模な造成を行った。1970（昭和45）年頃から3年ほどかけて行った。Bは、祖母からヤイガレの山の常畑は、170年前くらいに地震による山崩れで出来た土地だと教えられていた。そのような石の多い土地の方が、水はけが良く、茶の味がいいと聞いていたので、ヤイガレのおよそ6反



を茶畑化した。

ヤイガレの土地は、中央が小山になっており、木が生えていた。ブルドーザーで平らに均したところ、中から崩壊当時のものと思われる折れた木などが、大量に出てきた。また石が多く、土そのものも「肥えていなかった。」という。このため、木材のチップ工場から、木の皮などを譲り受け、8トントラック20台と、5トントラック20台分を、数年かけて運び入れてもらい、そこから一輪車を使って、一人で畑に入れていった。茶の苗は、補助金を使って1万本植えた。元の村長が、数年後に訪ねてきて、茶畑の数か所を掘って、土が出来ていることを確認し「よくこれほどしいえたな（よくこれほどまでにできたな）、この面積を。」とほめてくれたという。農業指導員の勧めに従い、ヤブキタとクラタテという品種を導入した（写真9）。

以上、AとBの耕作地の茶畑化の過程をまとめた。今回、1969（昭和44）年と1976（昭和51）年の空中写真を拡大したところ、ヤイガレのBの山の常畑と、Aの山の常畑が、茶畑に変化していることが確認できた。1976年には、ヤイガレまで林道が通っており、Bの山の常畑は、面積も広がっていた（写真8）。両者とも、集落の常畑や、集落から近い焼畑や山の常畑を、茶畑に転換したのであった。また、写真8から、Aの山の常畑は、元々から広大であったことがわかった。

昭和40年代半ばに、林道が通ったために、茶の運搬などにも利便性が向上した。

## （2）耕作地の変化と作物栽培

上坂本集落では、複合していた耕作地の多くが茶畑となった。しかし、集落の常畑の一部と、家周囲の常畑は、茶畑に転換されずそのまま残された。採草地は、昭和50年頃まで持続した。焼畑は、昭和30年代半ばに衰退したが、スギやヒノキは、昭和40年代後半まで売っていたため、伐採地では、焼畑を行わず、植林が行われるよ

うになった。苗が育つまでの下草が緑肥用に利用された。また、焼畑が茶畑に転換された場所では、周囲の防火帯の採草地（図7）も、茶畑用に利用された。

このような耕作地の変化は、作物栽培に影響を与えた。茶は、数種類あった茶カブから、主にヤブキタに代わった。ヤブキタは新芽の出が早く、量も多かった。ヤブキタに種類を統一し、列状に植えることで、機械で一斉に収穫することが可能になった。「茶原」は、現在見られるような整然とした列状の「茶畑」へと変化したのである。

また、常畑のオオムギや、焼畑の雑穀やマメ類は、茶畑への転換や焼畑の衰退で栽培地を失うことになった。住民は、オオムギについては、栽培を中止し、代わりにコメを購入するようになった。一方、ヒエやアワは、常畑と、茶畑内の「ダイギリ」跡で栽培を試みた。Aの家では、茶畑が広大となり、茶畑のどこかでは、「ダイギリ」と、作物栽培が行われているような状況であったという。焼畑で栽培したヒエやアワは、穂が小さく草丈が高いという特徴があった。常畑や茶畑で栽培したところ、さらに草丈が伸びてしまい、倒伏してしまった。その頃から、草丈が低く、穂が大きいショウガビエ<sup>6)</sup>と呼ばれるヒエが、導入されたという。Aは、従来から栽培されていたアワ加え、外部から譲渡されたアワも栽培するようになった。他にも、マメ類、イモ類、野菜類、ワサビ苗などが栽培され、近代品種の野菜も導入されていた。

これらの作物は、農協や、観光化が進む井川地域内の土産物店、井川の一部住民が行うようになった朝市、井川地域内の商店などで換金された。昭和30年代は、ダム関係の労働者世帯が井川に滞在しており、農産物は、需要が高かった。また、雑穀は、正月用の餅に利用する慣習があるため、市街地に転出した人からも需要があった。

このように、常畑や、茶畑の「ダイギリ」跡で雑穀栽培は続いたが、オオムギと、焼畑で栽

培されていた、ヒエやアワの栽培が無くなり、上坂本集落で、永年にわたって続けられた穀類の自給は、ここで中止された。

### 2.3 昭和 60 年代から令和 4 年現在

このように広大となった茶畑は、住民の高齢化などの影響で、昭和60年頃から縮小化が始まった。住民は、市街地に住む子どもなどから、農作業支援を受けて茶畑を維持するようになった。現在は、獣害が激化し、対策を講じた常畑で自給的な作物栽培が続いている。

#### (1) 茶畑の縮小化

Aの聞き取り調査から、茶畑の縮小化をまとめる。

Aは、広大な茶畑を3か所で耕作していた。Aは、昭和30年頃取得した、カタクラの9反の茶畑の栽培を、1975（昭和50）年頃に中止した。近くまで林道も開通し、茶も売れていたが、義母から、作業が大変なため栽培を中止するよう何度も言われていた。また、ほぼ一人で行っていた、草取りなどの日頃の管理作業が、体力的にも負担であった。さらに、ヤブキタを導入したため、新芽が一斉にそろい、収穫作業が集中することも、茶畑を縮小化する要因となった。

Aは、1985（昭和60）年頃に、上坂本集落から転出し、その数年後に、ヤイガレの茶畑の栽培も止めた。家から遠くなり、義父も高齢化したため、労働力不足が生じていたからである。Aは、集落に近い、元の茶原だったムラウエの茶畑を残すことにした。

Aは、茶の栽培を中止するにあたり、それぞれの茶畑にヒノキを植林した。5年ほどでヒノキが大きくなると、次第に茶の樹勢が弱まり、ついには根だけになるのだという。

一方で、茶畑の周囲にあった採草地には、植林を行わなかった。茶畑がヒノキ林になる頃、その中で、シイタケの原木栽培を行うことを想定して、茶畑周囲の採草地に、自然に出てきた

ナラ類を、シイタケの原木用に刈らずに残しておいた。現在では茶畑は、ヒノキ林となり、採草地はナラ類や雑木の林となっている。Aの想定通り、現在は、このナラ類が原木用に伐採され、元の茶畑の中で、シイタケ栽培が行われている。

Aは、茶畑を植林によって縮小化したが、約30年経った現在、茶畑をシイタケの原木栽培地として変化させていた。

#### (2) 茶畑の維持方法の変化

茶畑の収穫や管理は、日頃の除草などを、主に女性が行い、その他の季節的な作業は、男性が担っていた。賃金によって労働力を確保し、茶畑を維持していた時期もあったが、その人びとも高齢化し、次第に依頼先が無くなった。「ダイギリ」作業も毎年行う人は少なくなっている。

また収穫作業は、機械が導入されていたが、高級茶として販売する、茶の手摘みも続いていた。Aの家には、昭和20年代後半まで、親戚の高齢の女性が茶摘みの手伝いに来ていた。ダム建設後は、建設員の妻が子を連れて働きに来ることもあった。Aの茶畑の収穫を長く支えたのは、井川地域から、市街地に転出した女性たちであったという。しかし、15年程前から女性たちの労働も引き継がれなくなった。

現在、上坂本集落では、集落外や市街地に暮らす、子や兄弟などが、収穫を含めた茶畑の作業を支援している（写真10）。支援作業は、土日を中心に行われている。A・B・Eは、兄弟姉妹にあたるため、支援者も重なっている。支援者は、それぞれと相談しつつ、天候の具合を見て作業手順を組む。縮小化したとは言え、茶畑は広く、数か所に分かれており、限られた日程で作業を行うため、天候の影響で、年によって生産量に大きな違いが出るようになった。価格低迷の中で、茶は、長年の顧客用と、自給や贈答用として、栽培されるようになっている。

### (3) 常畑と茶畑での作物栽培

令和4年現在では、昭和30年頃から続く常畑と、縮小された茶畑が耕作地となっている。採草地は植林地となり、下草の代わりに、拾い集めた落葉が、利用されるようになった。また、ほとんどの栽培者が、農協などから肥料を購入している。

上坂本集落では、昭和60年頃から獣害が激しくなり、現在では、作物に大きな被害が出ている。茶畑と常畑の多くが斜面にあり、上部は山林と接しているため、電気柵を設置しても獣害を防ぎきれない（写真11）。雑穀は、精白技術を持つ人の他界や、鳥害と、それを防ぐ網の設置が、高齢となった栽培者の体力的な負担となり、栽培が減っていった。その他の作物は、獣害防除の対策を講じて、主に常畑で栽培されている。常畑では、在来作物と近代品種が並行栽培され（川上 2022）、それらは、栽培者自身の自給用と、近隣や農作業支援者である子や兄弟などへの贈答、直売所への小規模な出荷に使われる。常畑は、昭和30年頃から続けられている畑がほとんどで、家周囲や茶畑の中などに点在し、家ごとに3か所ほどの畑が耕作されている。

また、このように獣害が激しい中ではあるが、茶畑の「ダイギリ」跡での作物栽培は小規模に続いている。Aは、2021（令和3）年春に茶の「ダイギリ」を子世代に依頼し、茶の木は焼かず、サントウサイを栽培した（写真12）。しかし、これらは全てシカの食害にあった。Aの茶畑の畝間では、地中に残っていたジャガイモの発芽や、地カブが見られる。また、ここ数年は、豚コレラの影響からか、イノシシの被害が少なくミョウガが収穫できたという。Aは、「シカが見逃すかもしれない」といい、茶の中に赤ジソの種子を振りまいていた。Aは、獣害のため、ダイギリの跡地での栽培を中止するか検討している。

Eは、在来のインゲンマメとミョウガを茶の株間で栽培していたが、インゲンマメは、シカに食害され中止し、ミョウガは、獣害が少ない

家前の茶畑で栽培している。

Dは、茶の「ダイギリ」を夫に依頼し、茶の木を焼いて、その跡にダイズや野菜類を栽培した。犬を飼育しているために獣害は少なかったが、2022（令和4）年の春には、シカにキャベツ、ホウレンソウ、ブロッコリーを全て食べられてしまった。

このように、茶畑の中の自給的作物栽培の慣習は、小規模に続いているが、獣害が著しいため、ミョウガ、赤ジソ、フキ、地カブ、ヤマウドなど、茶畑で粗放的に栽培されていた作物や植物が、常畑で見られるようになっている。茶畑の中での作物栽培は、獣害の影響で常畑に移行しつつあると見られる。

### 3. まとめと考察

本稿では、静岡市井川地域の上坂本集落における、昭和20年代後半から現在までの耕作地の変化と、耕作地の変化に伴う作物栽培への影響を、耕作地の茶畑化を軸に、個人の事例から具体的に明らかにした。

先行研究では、高度経済成長期の焼畑衰退と、その後の焼畑が、植林地や換金作物の栽培地となり、増産されていく過程が主に対象となっていた。本研究では、昭和20年代後半から、令和4年現在までの耕作地全体の変化を、作物への影響も含め報告した。また、絵図や空中写真、聞き取り調査をもとに、昭和20年代後半の上坂本集落の概要や、耕作地の複合を明らかにすることができた。

上坂本集落の耕作地は、自給用栽培を目的とした「耕作地の複合期」から、換金作物の茶の栽培拡大を目指した「茶畑への転換・拡大期」、高齢化で栽培が困難となった「茶畑の縮小期」という変化をたどった。

次に、上坂本集落の茶畑化が進んだ理由について立地条件などから考察する。

前述したように、茶畑への転換の背景には、ダム建設後の井川地域の人びとの収入を、茶な



どの特産物で安定させるという、静岡県の行政としての姿勢があった。当時、井川村に滞在し、ダム建設後の農業の指針をまとめた高島は、井川地域における茶の品質を評価し、茶園の造成を行うことで、農業経営が有利になると述べている。右岸にある島和合集落の西山平（標高800メートル）が、茶の栽培限界であるため、800メートル付近までの耕作地では、できるだけ日当たりのよい場所に茶の植樹を勧めている（静岡県総合開発事務局編 1950: 154-155頁）。

このような中、昭和30年代に、上坂本集落から、対岸の大島集落に転出したKは、集落背後の緩斜面、イモリダンで茶を拡大していった。ダム完成後の間もない頃、義父は、ダシヤマのカップシを、小舟に積んで大井川を渡し、大島集落に運んだ。このカップシをイモリダンの茶畑に入れたという。また、大島集落は、上坂本集落より寒く、上坂本集落に所有している茶畑の方が、大島集落より新茶の摘み取り時期が早かったという。

このようなことから、低位の日当たりの良い場所や、集落近くの緩斜面が、茶畑に転換されていったと考えられる。また、大井川の右岸と左岸では、茶の収穫期に違いがあった。

以上を踏まえて、上坂本集落の立地条件を確認すると、集落は、大井川の左岸に位置し、南西に向かって開けている。冬期の2021年12月13日に、大井川両岸の日照を観察したところ、午後1時には、右岸の集落は、日陰となっていたが、左岸の上坂本集落は、西日が当たり、ションザワ付近は、集落からションザワの上流に向かって15時頃まで日当たりが良かった。またダシヤマ付近も中腹に日が当たっていた（写真13）。

このような立地条件に加え、上坂本集落背後の耕作地は、集落近くの標高900メートル以下の緩斜面に多く（図5）、さらに、日当たりの良さを兼ね備えていた。緩斜面は、個人所有で、所有者のみの判断で茶畑への転換に着手できた。またダムの影響で、転出者から好条件の耕作地

を集積することができた。

さらに、茶の生産面から検討するため、井川地域で、高度経済成長期から製茶工場に携わる1人に、聞き取りを行った。西日が当たる上坂本集落の茶畑は、反対に、朝日が当たり始める時間は遅い。しかし、茶に霜が降りた場合、霜がゆっくり溶け、新茶の霜害に合いにくい。このため、茶の収穫量が確保できたのではないかという。

以上のような立地条件と、耕作地の特徴や、栽培条件の良さなどが、上坂本集落の茶畑化が進んだ大きな理由であると考えられる。また、ションザワの集落の急斜面は、昭和10年代までに、焼畑から、茶原となっていた。茶の栽培に好条件がそろっていたため、早くから、茶畑への転換が進んでいたと考えられる。

次に、常畑と茶原の変化を整理し、作物栽培や、常畑と茶畑の現状についてまとめる。

上坂本の常畑は、家の周囲や、茶畑の中に数か所に分かれて点在しており、それらは、戦後から続く畑や、茶畑への転換・拡大期に、オオムギ畑から転換された畑であった。

昭和20年代後半は、常畑では、日常的に利用する野菜類などが栽培されていたが、昭和30年代の井川村の人口増や、地域の観光化などを背景として、雑穀や野菜などの自給用作物が換金されるようになった。上坂本集落の人口は、ダムの影響を受けた昭和30年代以降も減り続けたため（図3）、自給用作物の消費も減った。その余剰を、換金分に充てることができたと考えられる。令和4年現在は、上坂本集落の常畑で栽培される作物のほとんどが、栽培者と、市街地で暮らす子などの自給用となっていた。栽培内容や社会状況は異なるが、昭和20年代後半のように、自給を目的とした栽培となっている。

一方、昭和20年代後半の茶原は、コウゾやコンニャクなどの換金作物栽培と、フキ、ミョウガ、地カブなどの栽培、自家採種を行った自給的作物の、粗放的な栽培が兼ねられていた。さらに、「ダイギリ」という茶の伐採・焼却という、小さ

な焼畑<sup>7)</sup>をも内包していた。「ダイギリ」跡で茶を焼き、茶の樹勢が更新されるまでの間、作物を栽培するのは、焼畑の伝統であるという（野本 1972: 620–621頁）。茶原は、家から至近距離の焼畑休閑地であり、菜園でもあった。

茶原は、茶の拡大期にヤブキタが導入され、改植された。焼畑休閑期に出現した茶は利用されず、ヤブキタの苗を植えるようになった。上坂本集落の、焼畑に付随した茶の資源利用は、ここで終焉を迎えた。

一方、改植後も、「ダイギリ」跡での作物栽培の慣習は続いた。常畑と、茶畑の「ダイギリ」跡での作物栽培は、昭和20年代後半から現在まで、半世紀以上にわたって、持続していた。

最後に、耕作地の土壌と採草地の複合について、若干の考察を述べる。茶畑の拡大に、大量の木の皮が運び込まれ、土が作られた例からも推測し得るように、上坂本集落は、土壌に恵まれなかった。沢沿いには「崩れ」が多く（図4）、さらに多雨な気候から、土壌が流れやすかったと考えられる。耕作地へのカッポシの多用は、それに起因していると思われる。集落近くの緩斜面を利用した、焼畑に付随した採草地の複合が、上坂本の耕作地の土壌を支えていた。

以上、上坂本集落の茶畑化についての考察を中心に、作物栽培の変化と持続、耕作地の土壌についてまとめた。

先行研究で取り上げた、南アルプス周辺山村は、静岡市井川地域とともに、南アルプスユネスコエコパークに登録されており、在来知を活かした暮らしが評価されている。今後は、上坂本集落の在来知などを、南アルプス周辺山村の中に位置付けていき、広い視野の中で、研究を行っていくことが課題である。

山村は、人口減少などから、集落そのものの持続が危ぶまれている。このような中、上坂本集落では、自給用作物と換金作物の双方を、過去半世紀以上に渡って栽培し続けてきた。厳しい栽培環境の中で、培われた栽培方法などを山

村から学ぶことは、持続可能な今後の農業や、食料自給を考える上で重要である。

## 謝辞

この調査および研究を行うにあたり、お世話になった静岡県井川地域の上坂本集落の皆様、何日間も農作業に同行させて下さったA様、畑を快く見せて下さり、お話を聞かせてくださった井川地域の皆様、井川関係の刊行物などを見せて下さった皆様、筑波大学山岳科学センター井川演習林、井川森林組合、静岡市井川支所、静岡市役所、静岡県中部農林事務所、静岡地方方法務局、中部電力株式会社の皆様に大変お世話になりました。また、中央大学山村研究会の白水智先生、高野宏峰先生、常葉大学講師の外立ますみ先生には、現地での歴史や民俗に関連する情報のご教示と資料のご提供を頂きました。

調査にあたっては、生き物文化誌学会のさくら基金（令和4年度）、総合研究大学院大学地域文化学専攻の学生派遣事業（令和元年および3年度）の助成を受けました。

池谷和信先生には、丁寧なご指導を何度も賜りました。院生の新海拓郎さんからは、貴重な意見をいただきました。

記して感謝いたします。

## 注

- 1) 昭和30年代から第一次石油危機が起こった昭和48年にかけての日本経済をいう（小学館『大辞泉』編集部編 1995: 910頁）。
- 2) 山梨県、静岡県、長野県にまたがり南北に走る山脈（小学館『大辞泉』編集部編 1995: 16頁）。
- 3) 絵図上の長さ2厘が1間の寸法を表す縮図。尺貫法では1厘が約0.303ミリで、1間は約1,818ミリなので、およそ1/3000の縮尺となっている（小学館『大辞泉』編集部編 1995: 厘について 2796頁、寸について1452頁）。
- 4) この写真が掲載されている、農林省山林局編『焼畑及切替畑ニ関スル調査』1936、は、当時の治水関係資料である。米家は、「報告書の序文」には、森林治水事業の展開のなかで否定的な



評価が決定的となった焼畑の位置づけが明確に記されている。」という（米家 2019: 202頁）。本稿への掲載は、昭和10年のダシヤマの焼畑が撮影された歴史的資料として用いた。

- 5) これらの家は、斜面の至近距離に建っているが、低位にあった家が水没のためションザワの高台に移転し、代わりに新築されたものである。
- 6) ショウガビエは昔から畑で作っていたと記憶している人もいる。
- 7) 伐採、焼却、耕作地の整理、雑草の種子焼くという面が焼畑と共通している。

## 引用文献

飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究  
所編

2009 『遠山谷北部の民俗』。

井川村・静岡ニュース社

1959 『井川ダムの記録』。

池谷和信

2019 「日本の山々は何に使われてきたか—  
「温帯山地」における多様な環境開発」  
山本紀夫編『熱帯高地の世界「高地文明」  
の発見に向けて』127-171、ナカニシヤ  
出版。

及川清秀

2007 『山のむらから—歴史と民俗の転換期—』  
近代文芸社。

落合寿幸・下江一朋・田城賢司・田中真理子・古  
性 昇

1993 「大井川最奥の集落田代の暮らしの変化」  
筑波大学大学院教育修士地理学野外実  
験報告作成委員会編『井川の自然と暮  
らし』15-29。

上村民俗誌刊行会編

1995 『南信州・上村 遠山谷の民俗』。

川上 香

2022 「日本の山村における地カブの栽培方法  
について—静岡県井川地域の事例—」  
『総研大文化科学研究』18: 49-64。

米家泰作

2019 『森と火の環境史—近世・近代日本の焼  
畑と植生』思文閣出版。

静岡県安倍郡井川村役場編

1953 『井川村の概況』。

1958 『井川村の概況』。

1964 『井川村の概況』。

静岡県総合開発事務局編

1955 『新しい村造り—山地農業の理論と実  
際—』。

静岡県教育委員会編

1991 『田代・小河内の民俗—静岡市井川』。

静岡県内務部編

1916 『静岡県部落有財産統一整理事例其一』。

小学館『大辞泉』編集部編

1995 松村明監修『大辞泉』小学館。

武貞稔彦

2009 「ダム建設による立ち退きと補償・再定  
住政策に関する研究」東京大学学位論文。

中部電力株式会社井川水力発電所編

『井川発電所奥泉発電所竣工記念参拾貳  
年拾月』非売品。

徳嶺庄一郎・久田健一郎

2009 「大井川上流域の四万十帯における岩盤  
クリープ」『筑波大演習林報告』25:  
1-24。

早川町教育委員会編

1980 『早川町誌』。

福井勝義

1974 『焼畑のむら』朝日新聞社。

農林省山林局編

1936 『治水関係資料第9号焼畑及切替畑ニ関  
スル調査』。

野中健一

1992 「長野県下栗地区における山村生活誌」  
『北海道大学文学部紀要』41(2): 1-32。

野本寛一

1984 『焼畑民俗文化論』雄山閣出版。

松田民俗研究所編

2004 『井川雑穀文化調査報告書』静岡市教育  
委員会。

松下 智

2002 『ヤマ茶の研究—日本茶の起源・伝来を  
探る—』愛知大学総合共同研究所編、  
岩田書院。

松本繁樹

1990 「赤石山地南部におけるかつての焼畑と  
高位緩斜面」佐藤照雄先生退官記念会  
編『社会科地域学習の方法』158-166、  
明治図書出版。

宮本 勉

2019 「駿遠茶一件の歴史的特質」本多隆成編  
『近世静岡の研究』381-419、清文堂出版。

矢島仁吉

1934 「静岡市を中心とする茶業の地理学的研

- 山田義尚  
1994 究」『大塚地理学会論文集』4: 127-150。  
「上坂本における焼畑技術と耕作地分布」  
筑波大学大学院教育修士地理学野外実  
験報告作成委員会編『井川の歴史と暮  
らし』29-34。
- 山本正三  
1971 『茶業地域の研究』大明堂。

2022年9月30日 受付  
2022年12月7日 採択決定

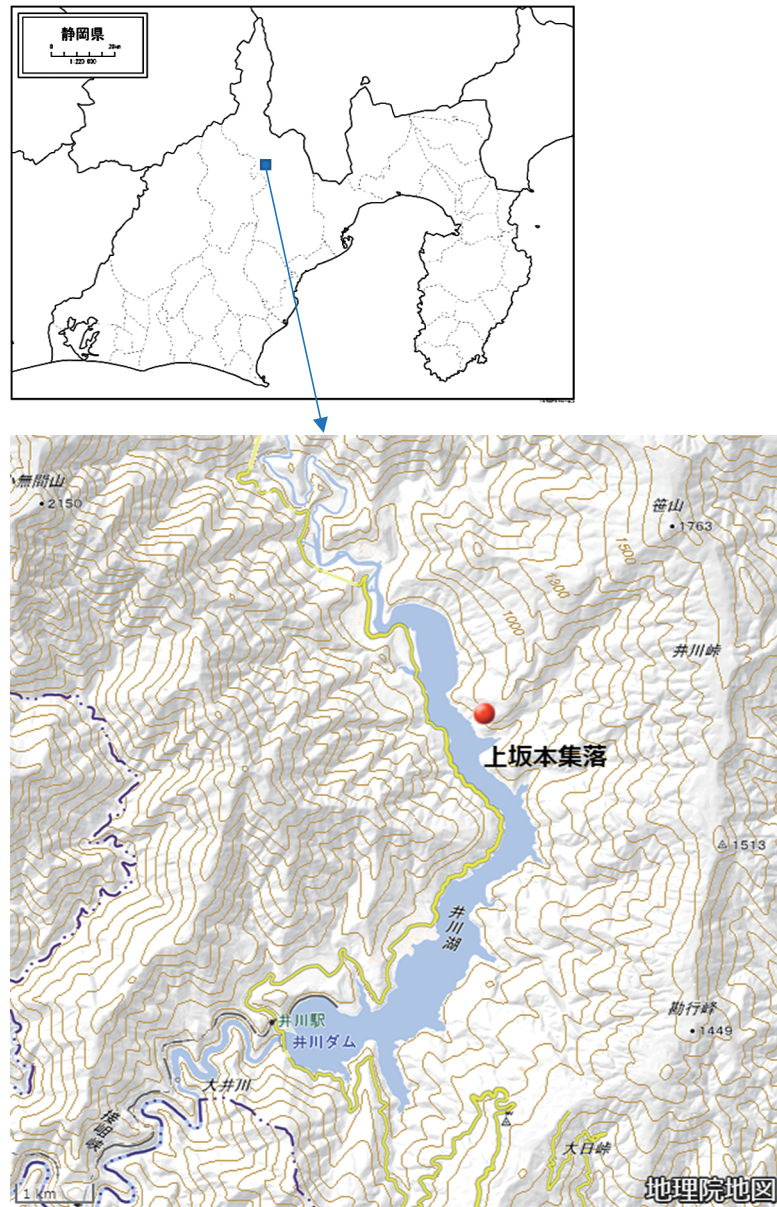


図1 静岡県内の井川地域中心部の位置と上坂本集落の位置  
フリー素材と地理院地図 1/100,000 を用いて作成

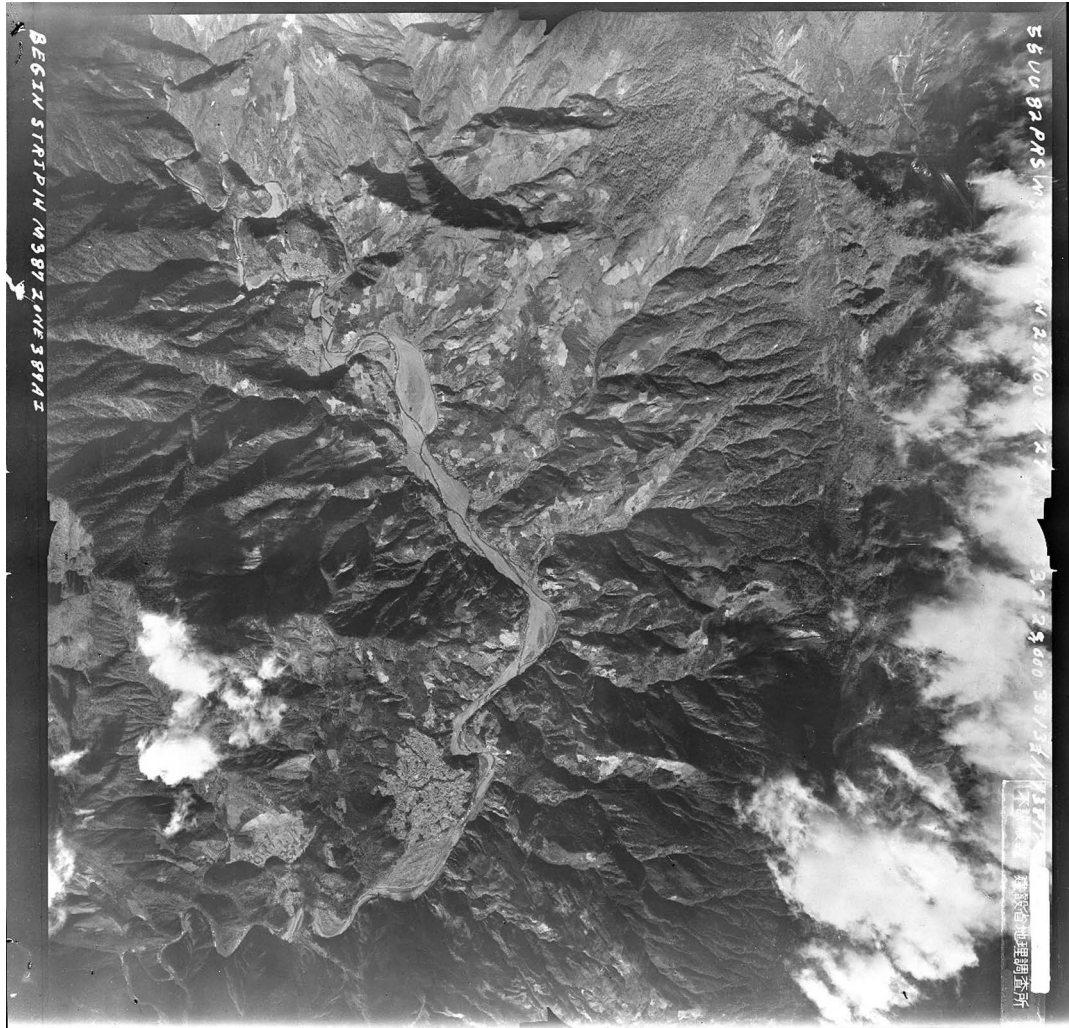


写真 1 大井川上流部の航空写真 国土地理院所蔵 撮影者米軍 1947（昭和 22）年 11 月 28 日撮影  
全体をそのまま掲載し、周囲の黒み部分のみトリミングを行った。中央が大井川で、画面右側が左岸である。  
焼畑と思われる白色部分が点在している。





写真2 井川ダム建設前の上坂本集落  
『井川ダムの記録』（井川村・静岡ニュース社編 1959年、頁数なし）接写し拡大、トリミングして引用。



写真3 現在のヒカケンノウ（2021年12月筆者撮影）

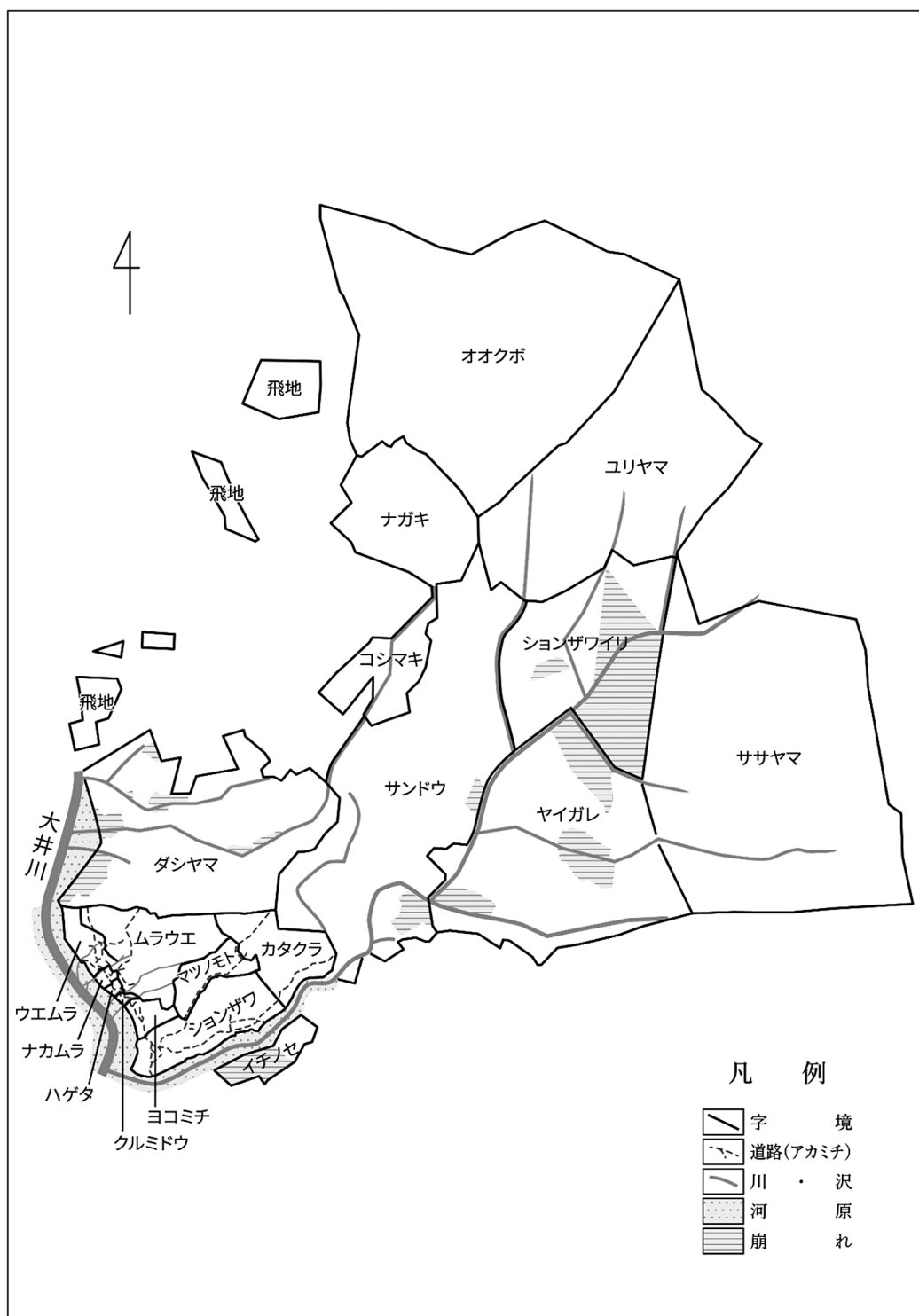


図4 昭和20年代後半から昭和30年代はじめの上坂本集落の概念図  
「駿河国安倍郡上坂本村之絵図」と、小河内集落の「地租改正地引絵図」を参考に作成



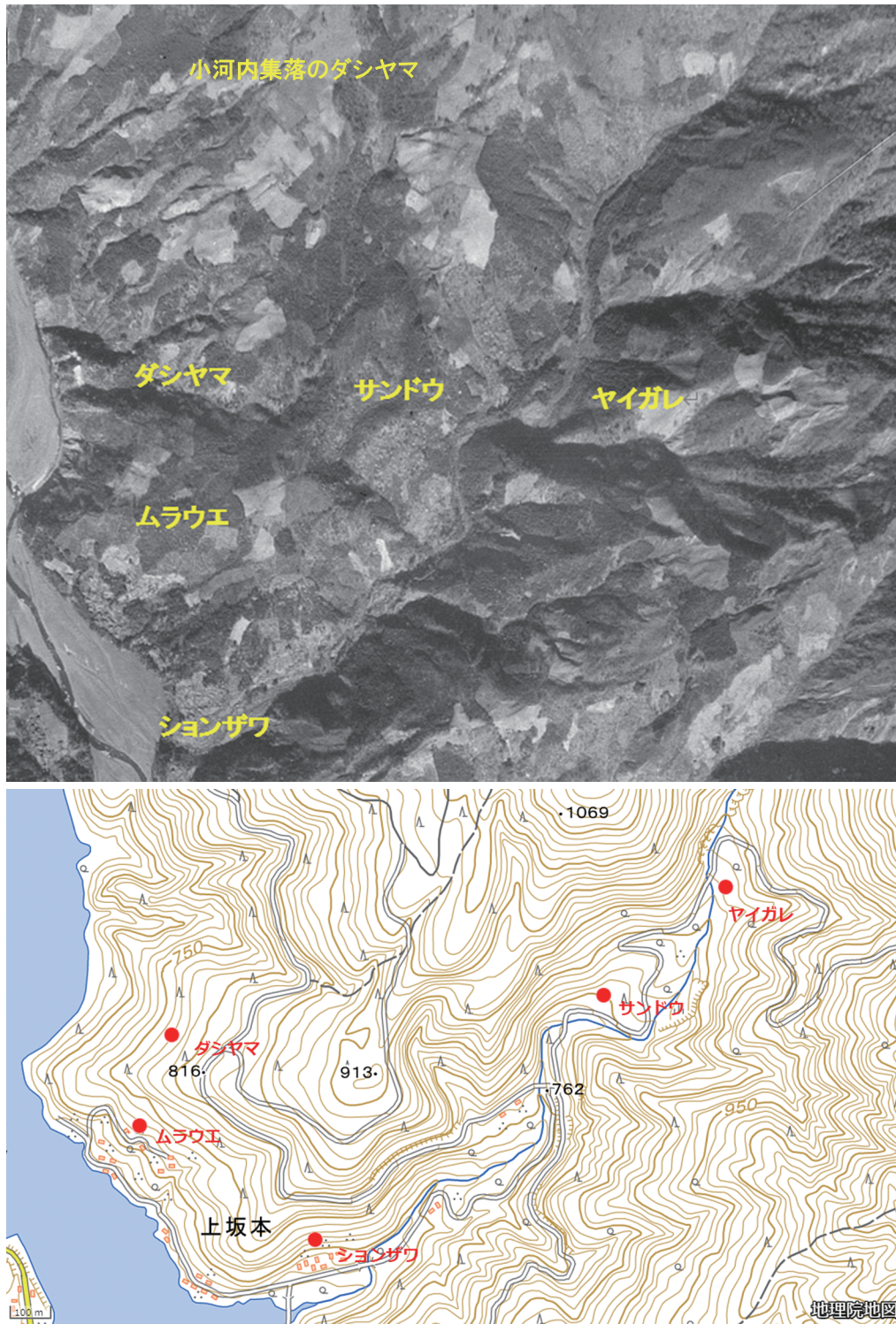


図5 上坂本集落の字の位置

上：写真1を拡大し、聞き取り調査や旧井川村森林基本図を参考に字名のおおよその位置を示した。  
下：上と同様に、現在の地図に字名のおおよその位置を示した。



静岡県安倍郡井川村大字上坂本字出山

**写真4** 現在のダシヤマ付近と昭和10年の上坂本集落ダシヤマ（出山）

上：対岸から見た現在のダシヤマ付近（2021年12月筆者撮影）

下：国立国会図書館デジタルコレクション農林省山林局編『治水関係資料第9号焼畑及切替畑ニ関スル調査』1936、頁数は無く冒頭の数頁中に記載されている写真（撮影1935年10月）。該当頁をダウンロードし、拡大トリミングを行った。下のダシヤマが、現在のダシヤマのどこにあたるかは、特定できなかった。



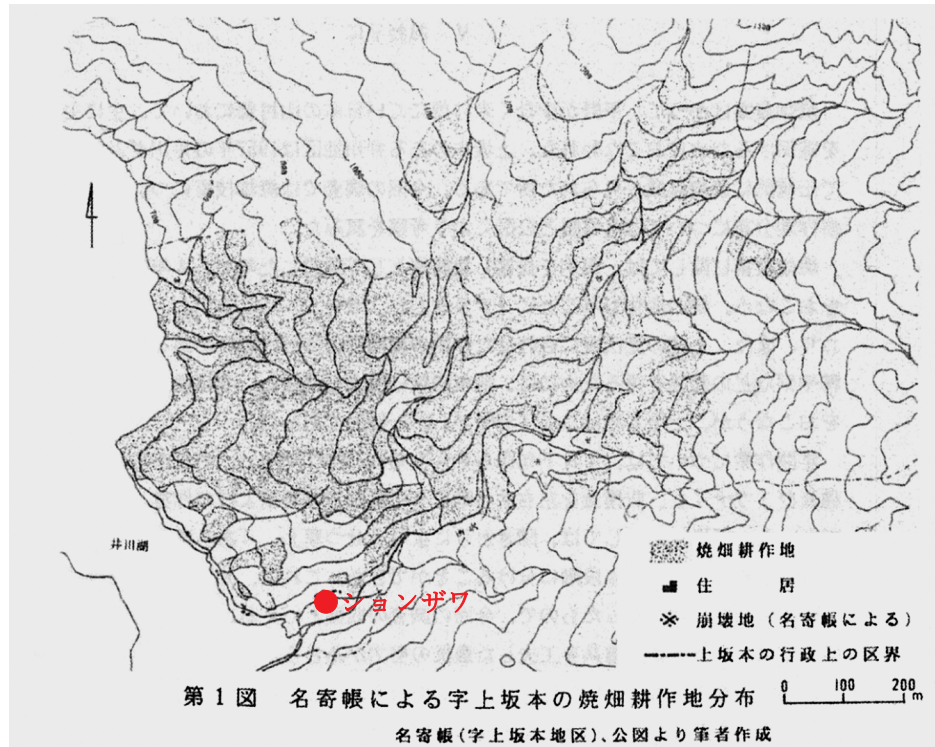


図6 上坂本集落の焼畑耕作地

山田義尚 (1994)「上坂本における焼畑技術と耕作地分布」33頁「第1図名寄帳による字上坂本の焼畑耕作地分布」を引用。コピーをスキャニングして拡大し、字名を加筆した。

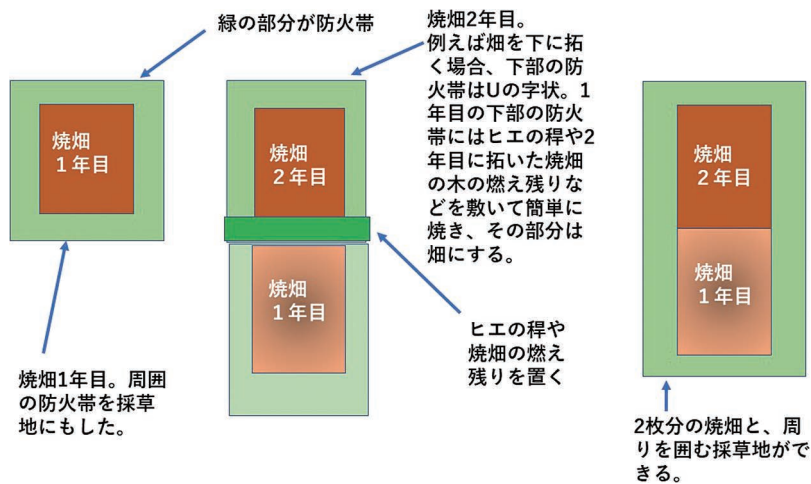


図7 焼畑周囲の防火帯（採草地）と焼畑の拡大モデル  
(聞き取り調査により筆者作成)



写真5 カップシが束ねられたイナブラ  
(参考写真 西山平集落にて 2021 年 12 月筆者撮影)

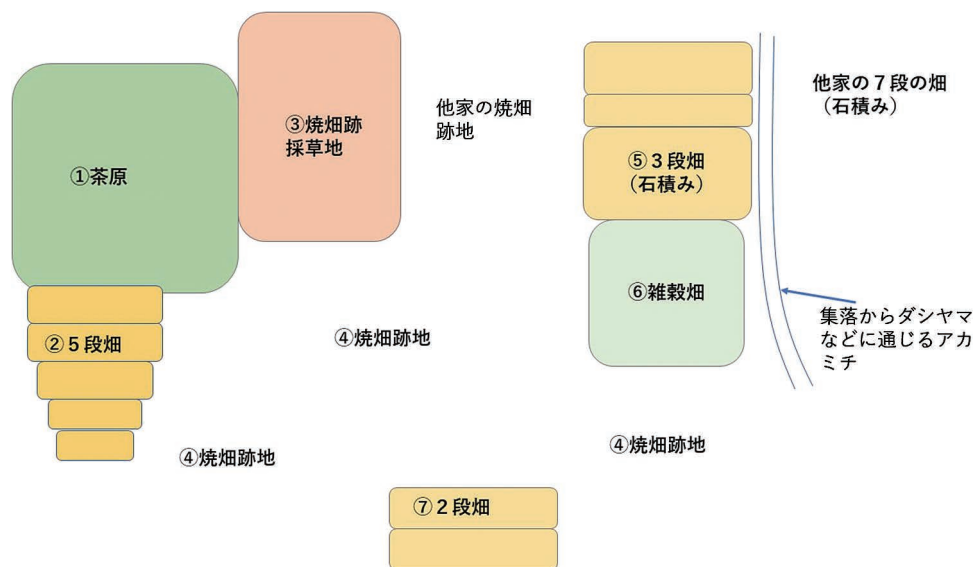


図8 茶畑化前の耕作地 (A の聞き取り調査により筆者作成)





図8の④焼畑跡地の茶畑と②5段畑跡地（左下の側溝の手前）の現在の状況

写真6 Aの現在の茶畑（上：2021年12月、下：2021年5月筆者撮影、加筆）





所 沢 橋

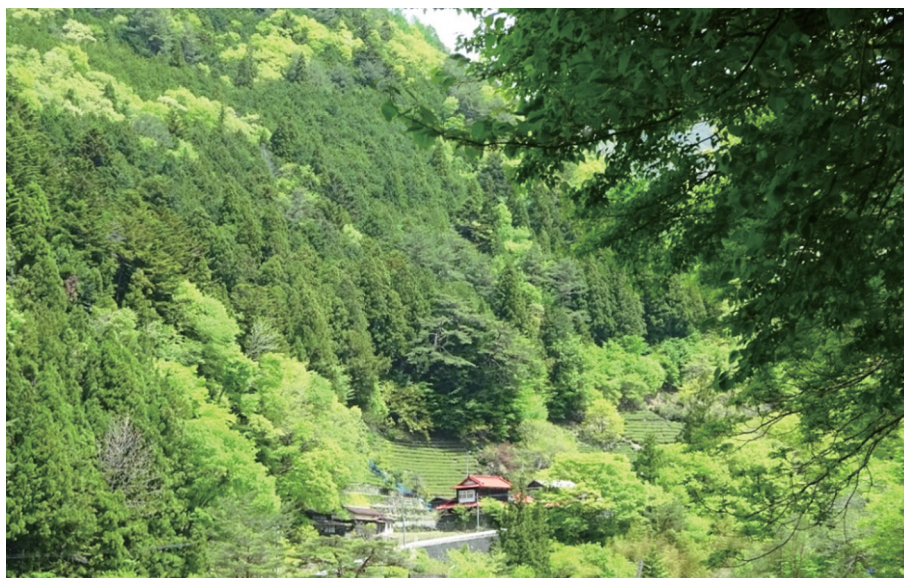


写真 7 茶原から茶畑への変化

上：ションザワの茶原（1957 年頃撮影）『井川発電所奥泉発電所竣工記念参拾貳年拾月』「所沢橋」中部電力株式会社井川水力発電所編

上記より引用。頁数なし。提供：中部電力株式会社 コピーを接写後、拡大しトリミングを行った。

下：現在のションザワの茶畑（2021 年 5 月筆者撮影）



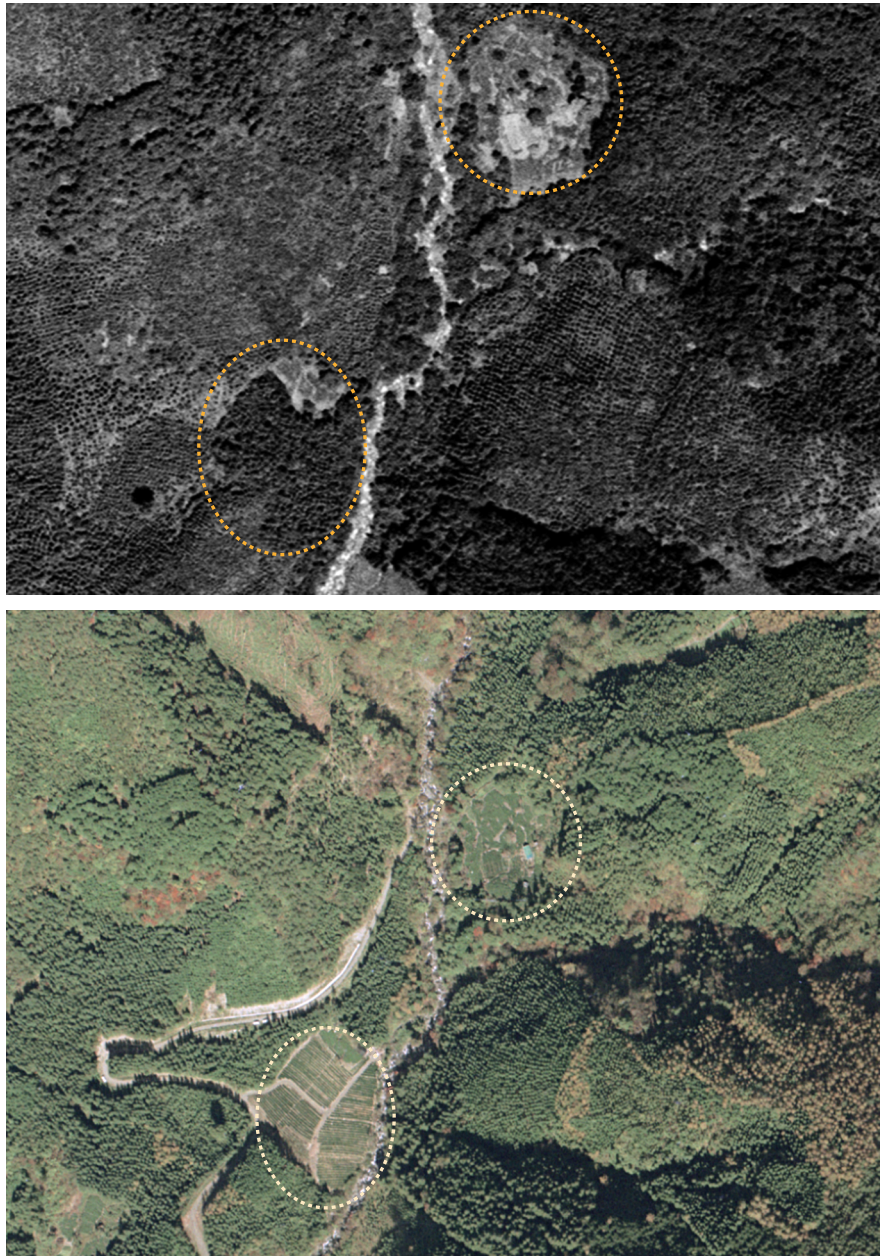


写真8 上：1969（昭和44）年から下：1976（昭和51）年の耕作地の茶畑化  
 国土地理院所蔵の空中写真（各同年撮影）を拡大してトリミングし加筆した。沢の上流がA、下流がBの耕作地（山の常畑）であった。Aの耕作地は、上の段階で茶畑になっているようである。スギと畑のような場所が見える。下では茶畑が大部分となり、青色の小屋の屋根が見える。Bの耕作地は上では狭く、下流に向かって木が多い。下では、耕作地が増え、全面が茶畑になっている。茶畑の左は林道が開通している。（Bの茶畑は沢の左にあるが、ヤイガレに属している。）





写真 9 左：B の現在のヤイガレの茶畑 右：茶畑の土壌の様子  
(2021 年 5 月筆者撮影)



写真 10 茶の収穫支援 (2021 年 5 月筆者撮影)





写真 11 現在の上坂本集落の常畑と茶畑  
写真手前が畑で、上部では、茶畑と山林が連続している。(2022 年 5 月筆者撮影)



写真 12 茶畑の「ダイギリ」跡地で栽培中のサントウサイ  
(2021 年 12 月筆者撮影)





写真 13 大井川左岸上坂本集落の日照

(2021 年 12 月 13 日筆者撮影)

上：対岸の中山集落から撮影した上坂本集落 (13 時 50 分頃)

中：対岸の中山集落から撮影した上坂本集落のションザワ付近 (15 時 10 分頃)

下：対岸の大島集落から撮影したダシヤマ (詳細な場所は不明) (15 時 6 分頃)